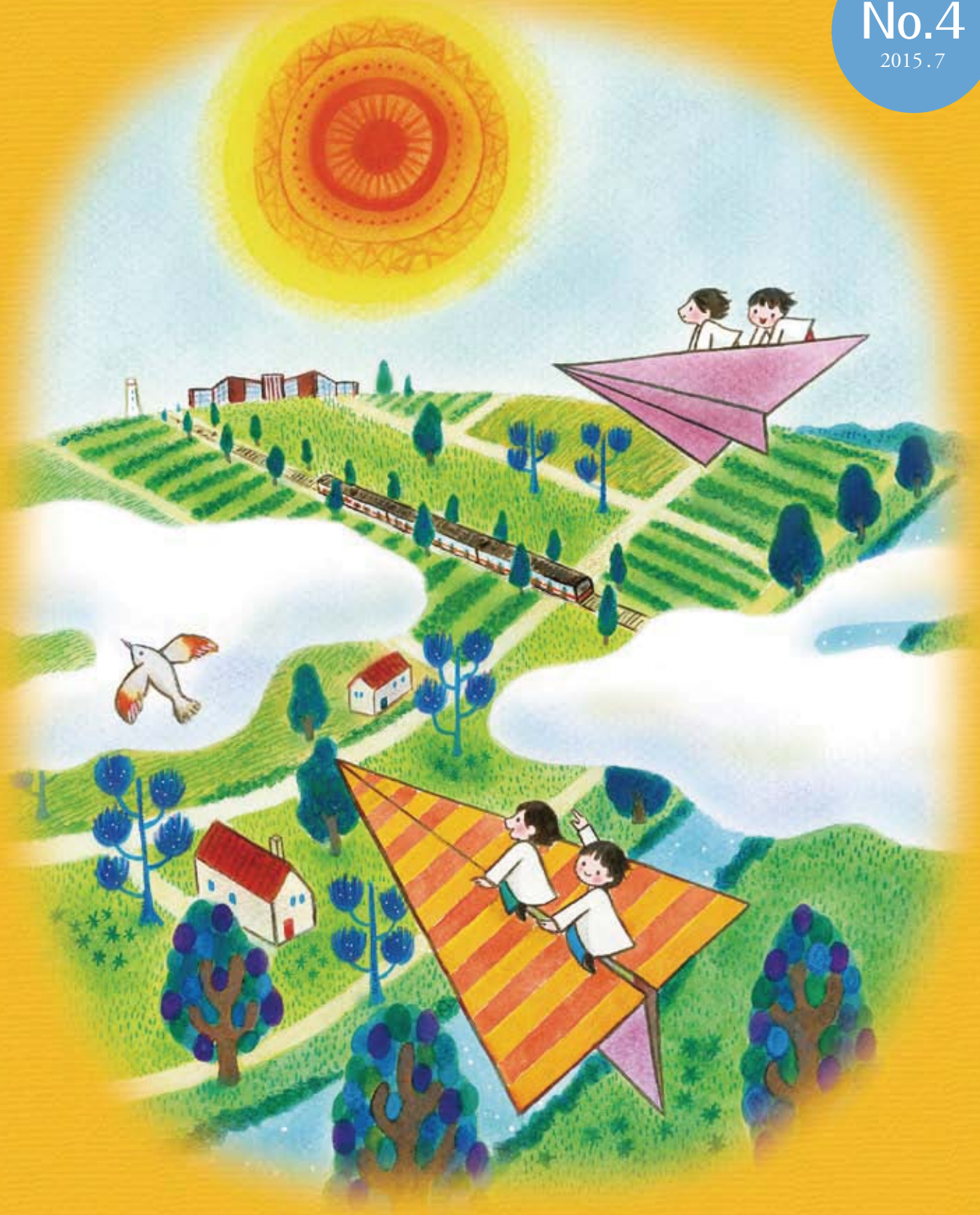
シンシア

あなたと女子医大を結ぶコミュニケーションマガジン

Sincere

TOKYO WOMEN'S MEDICAL UNIVERSITY

No.4
2015.7



楠本 イネ

（くすもと いね　1827～1903年）

日本の女性医師の先駆けとなったシーボルトの娘

◆14歳で医師になることを決意

「難産でも医者（男）を拒み、手遅れになる場合が多い。女の医者がいれば命を落とさず、子も助かる。イネさんには産科の医者になってもらいたい。シーボルト先生は産科にも長じておられた。イネさんが産科医になられるのは自然の理だ」。シーボルトの門弟・二宮敬作からそういわれたイネは、医者になろうと決心する。14歳のときだった。

イネは1827年、ドイツ人の医師フォン・シーボルトの娘として誕生。母は長崎出島でシーボルトのお抱えだった其扇（そのおうぎ）（本名・滝）である。鎖国下の当時、日本に入国できるのはオランダ人と中国人だけだった。シーボルトはドイツ人だったが、出島のオランダ商館医として日本の土を踏んだのである。そして鳴滝塾を開き、多くの門下生に医学を教えた。だが、シーボルトは日本地図を入手するなどの国禁を犯し、イネが2歳のときに国外追放となった。

寺子屋へ通うようになったイネはたちまち頭角を現し、学問を身につけてオランダ語でシーボルトに手紙を出したいと思うようになった。手を焼いた母の滝は、伊予宇和島で開業医をしていた二宮敬作にイネを預けることにしたのである。

◆村田蔵六からオランダ語を学ぶ

敬作のもとで5年間、医学の基礎を学んだイネはその後、岡山の石井宗謙を訪ねる。宗謙もシーボルトの門弟で産科に秀でていた。産科医としての知識と技術を修得していったイネは、その知的な美貌とも相まって岡山で評判を呼び、失本稲と名乗るようになった。失本（しいもと）はシーボルトにちなんだ姓である。

東京女子医科大学のキャンパス内にある楠本イネ像（イネゆかりの愛媛県出身の彫刻家・乗松巌作）。

そんなイネに悲劇が訪れる。宗謙から情交関係を迫られ身ごもってしまったのだ。失意のうちに女児を出産したイネは、長崎の母のもとへ帰った。そこで再会した二宮敬作から、村田蔵六（のちの大村益次郎）に師事するようすすめられる。緒方洪庵の適塾で塾頭を務めた長州藩の蔵六は、宇和島藩主の伊達宗城（むねなり）から招かれていたのである。イネは再び宇和島へ行き、蔵六からオランダ語を学んだ。

のちに大村益次郎が刺客に襲われて大阪府病院に入院したとき、娘夫婦と大阪で暮らしていたイネはオランダの軍医ボードインとともに益次郎の治療にあたり、最期を看取った。

1859年、滝・イネ親子は追放令が解除されて再来日したシーボルトと30年ぶりに再会した。シーボルトは1862年まで日本に滞在し、66年にミュンヘンで死去。その3年後に母の滝も世を去った。

◆宮内省御用掛の栄誉に浴する

イネは38歳のとき、伊達宗城から楠本伊篤（いとく）と改名するようにいわれ、宗城に感謝するとともに医学の道を究めたいという気持ちをさらに強くした。

44歳になったイネは東京へ赴き、イギリス公使館の通訳官をしていた異母弟のアレキサンデルと会い、彼が手配してくれた築地の洋館で「産科医」の看板を掲げた。イネの名声はすぐに広まり、多忙な日々を送るようになった。

そうした中、イネは福澤諭吉と会う機会を得て宮内省御用掛に推挙され、産科医として明治天皇の典侍・葉室光子に付き添うという栄誉に浴した。これにより、イネの名声はさらに高まった。

1875年、医術開業試験が導入された。医学の急速な進歩を感じはじめたイネは、余生を長崎で送ろうと帰郷した。だが1885年、荻野吟子が女性で初めて医術開業試験に合格して医院を開業したことを知り、再び東京で医師として腕を振るいたいと思うようになった。イネは1889年に再上京を決意。すでに62歳を迎えていた。それから5年間、「楠本医院」の看板を掲げて診療活動を行い、1903年8月、76歳で波乱の生涯を閉じた。

東京女子医科大学の創立者・吉岡彌生は楠本イネについて、「荻野吟子をはじめとする新しい女性医師が輩出されてくるまでの過渡期を代表した唯一の女性医師であった」というように評している。

参考文献／『ふぉん・しいぼるとの娘』（著者：吉村昭、発行：新潮社）、『吉岡弥生傳』（編者：吉岡彌生女史傳記編纂委員会、発行：東京聯合婦人會出版部）

Sincere シンシア

2015年7月 No.4

Sincereは「誠実な」という意味。東京女子医科大学の理念である「至誠と愛」の「至誠」を表しています。

CONTENTS

04 至誠人
貫戸 朋子（産婦人科医）
難民キャンプでの医療活動を通じて
政策の大切さを痛感しました

06 医療研究最先端
新しい医療分野“遺伝カウンセリング”で最先端をひた走る「遺伝子医療センター」

10 女子医のある街
千葉県・八千代
■八千代医療センター：新病棟を建設し成人医療の充実をめざす
■八千代医療センター周辺散歩：京成バラ園／新川千本桜／源右衛門祭
■グルメスポット：さわ田茶家／ラ・ターブル／菓匠白妙

14 医療現場最前線レポート
腎移植・泌尿器腫瘍治療で我が国屈指の実績を誇る泌尿器科

17 こんなところが女子医大
国際交流（看護学部）
文化交流を含む充実したプログラムが自慢

20 健康維持・予防セミナー
ストレス
漢方によるストレス・ケアのすすめ

22 ふれあいレポート
わかまつ学級
楽しく勉強しながら入院生活を送る子どもたち

23 吉岡彌生物語 その4
女医学校を河田町へ移し寄宿舎も新築

遺伝カウンセリングを行う女性スタッフたち。

手術支援ロボット「ダビンチ」の操作シーン。

アメリカからの留学生にお茶のおもてなし。

院内学級で学習する新1年生。

【表紙】
風に乗って
イラストレーター
中井 絵津子

空を飛ぶなら、紙飛行機がいい。
高速でもないし、大人数で乗れないけど
風の向きを読んで操縦していく紙飛行機に
君とふたりで乗ろう。

ふわりと風に乗れたら
草の匂い、川のせせらぎ、
樹々の揺れる音、全部感じながら
眩しい太陽に向かって行くよ。

※東京女子医科大学病院総合外来センター１階小児科待合室の壁画は中井さんが描いたものです。

至誠人

難民キャンプでの医療活動を通じて政策の大切さを痛感しました

現在、多くの日本人医師や看護師が海外で医療・人道援助活動を行っているが、その先駆けとなったのが、1993年に日本人医師として初めて「国境なき医師団」の登録医となり、スリランカとボスニア・ヘルツェゴビナで医療活動に携わった貫戸朋子さんである。

貫戸 朋子（産婦人科医）

祖母に喜ばれた女子医大への進学

私は小さい頃からスポーツが好きで、特にサッカーが得意でした。小学校の体育の時間にサッカーをやると、私が一番うまい。でも、当時サッカーは男子のスポーツとされ、地域のサッカークラブも女子を受け入れてくれませんでした。私は本を読むことも好きで、サッカーと同じくらい読書にも熱中しました。

そんなわけで、大学への進路はスポーツ関係か文学系も考えましたが、医師をしていた父の影響もあり、医学部をめざすことにしました。父からは、「女性も経済的に自立しなければならない」と聞かされていましたので、「医師になれば自分で食べていけるだろう」と思い、両親のすすめもあって東京女子医大に進学しました。祖母は父方・母方とも高等教育を受けており、私が女子医大へ行くと報告すると「吉岡彌生のところだね。それはいい」と、とても喜んでくれました。とりわけ父方の祖母は、一人娘だったため東京へ行かせてもらえなかったこともあり、「私も吉岡彌生のところで学びたかった」といってくれたことが心に残っています。

すばらしい先生とすばらしい授業

在学中は、女子医大出身の大先輩や他大学から来られた方々などすばらしい先生方に巡り会い、すばらしい授業を受けることができたのが大きな財産となっています。当時、日本心臓血圧研究所に“あんぱん会”というのがあり、朝早くから医師や学生が集まって、あんぱんを口にしながら名誉教授だった心臓外科の榊原仟（しげる）先生（1979年没）を囲んで症例検討会や勉強会を行っていました。私はこの“あんぱん会”が楽しみで、末席から榊原先生を見ているだけでワクワクしたものです。

病理学の梶田昭先生（2001年没）からは基礎をしっかり身につけることの大切さを学び、病理学が大好きになりました。神経内科とは何かを教えていただいた丸山勝一先生（2009年没）、個性豊かな消化器外科の羽生富士夫先生（2010年没）の講義も、それぞれ人柄が伝わってくる印象深いものでした。物静かで周囲が敬意を払わずにはいられない消化器系の山田明義先生、インスリンの自己注射認可に尽力された糖尿病センターの初代所長・平田幸正先生（2014年没）もかけがえのない恩師です。

のちに病院長を務められた腎移植の先駆けである東間紘（とうまひろし）先生（腎移植・血管外科学研究会顧問）は、患者さんを丁寧に診察するため、授業時間になってあわてて何も持たずに講義室へ駆け込んでこられるような方でした。東間先生からは「50～60代の女性で目に見えないような血尿が続いているときは、尿管がんの疑いがある」と教えられました。数年前、他病院の腎臓内科にかかっていた女性が婦人科の私のところに来られ、ずっと血尿が続いていることを知って尿管がんかもしれないと思い、調べてもらったところやはりそうでした。

貫戸 朋子（かんと ともこ）

1955年京都市生まれ。東京女子医科大学医学部卒業後、京都大学医学部婦人科学・産科学教室に入局。京都大学付属病院などを経て、1993年「国境なき医師団」の日本人医師第一号となり、スリランカとボスニア・ヘルツェゴビナで医療活動に従事。その後、米ジョンズ・ホプキンス大学公衆衛生大学院で修士課程修了。1999年、NHKテレビ「課外授業 ようこそ先輩」に出演。その模様は『国境なき医師団：貫戸朋子 別冊課外授業 ようこそ先輩』に詳しく描かれている。同番組は国際エミー賞（子ども・青少年番組部門）を受賞した。著書に『「国境なき医師団」が行く』、共著に『NHK未来への提言 アーネスト・ダルコー エイズ救済のビジネスモデル』がある。

ボスニア・ヘルツェゴビナ スレブレニツァの小学校にて。

東間先生の授業が長い年月を経てよみがえり、たいへん役立ったわけです。

日本人初の国境なき医師団メンバー

卒業後、京大医学部の婦人科学・産科学教室に入局し、8年間過ごしました。その当時、新聞で「国境なき医師団」というのを目にし、興味を引かれました。環境がまったく違う外国で、学んできた医療を生かしてみたいと考えていた私は、国境なき医師団のパリ本部を訪れました。そして、日本人初の登録医となってスリランカのマドゥという難民キャンプに派遣されることになりました。1993年のことです。

スリランカは10年越しの内戦が続いていました。雨期になるとバケツの水をひっくり返したような雨がずっと降り続き、カビが生えて洗濯物は乾かない。戦闘は少なくなるものの、難民たちはうつ病をはじめさまざまな疾患に見舞われ、子どもたちも元気がなくなる。そんな環境に敢えて身を投じたわけですが、自分で決心して行ったわけですから後戻りはできません。スリランカでは6か月間、医療活動を行いました。

帰国後、戦争に懲りたはずの欧州でなぜ紛争が起き、貧困や飢餓が生じているのかとの好奇心から、今度は志願してボスニア・ヘルツェゴビナのスレブレニツァという街へ行きました。この街は国連軍の保護下にあった安全地帯でしたが、いつ戦闘が起きてもおかしくない状況でした。そこに11か月間、滞在しました。

疫学と統計学を生かしていきたい

国境なき医師団としての医療活動を通じて、いかに政策が重要であるかということを痛感しました。政策がしっかりしていなければ、いくら現場で頑張っても何も変わらないと。そうした政策につながるような勉強をしたいと思い、ジョンズ・ホプキンス大学公衆衛生大学院へ留学し、疫学と統計学を学びました。そのときに学長夫妻から、「女子だけの医科大学が日本にあるのはすばらしい。アメリカにはもう残っていない。誇りを持って女子医大を死守してほしい」と激励されたことをとても嬉しく思いました。

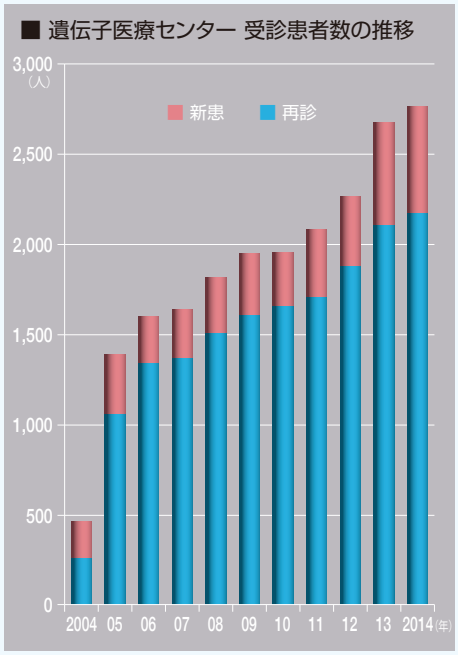
その後、女子医大の国際環境・熱帯医学教室に在籍中、NHKのテレビ番組「課外授業 ようこそ先輩」に出演する機会があり、「戦争を学ぶ 命を考える」というテーマで、母校（京都教育大学附属京都小学校）の6年生に国境なき医師団での経験を題材とした授業を行いました。1999年4月に放映されたこの番組は、その年の国際エミー賞を受賞しました。会場で審査員のおざなりではない拍手を目にしながら、いい番組は国境を越えて評価してもらえるのだと感激しました。

私は人間が争うという環境の中でいろいろな経験をし、それを通じてできるだけ患者さんの負担を小さくする医療や充実した予防医療を提供することが重要だと考えています。そういう医療社会をめざし、疫学と統計学の基礎を学んだことも、これからの医療に役立てていきたいと思っています。

新しい医療分野“遺伝カウンセリング”で最先端をひた走る「遺伝子医療センター」

東京女子医科大学は2004年、全国の医療機関に先駆けて「遺伝子医療センター」を開設した。遺伝性疾患には難病が多く、受診患者さんやそのご家族の精神的負担は計り知れない。そこで女子医大では、医療と心理の両面からサポートする遺伝カウンセリング体制を構築。一人ひとりの体と心に寄り添った“オーダーメイド医療”を推進している。

遺伝カウンセリングシーン。専門医、臨床心理士、認定遺伝カウンセラーが対応する。



遺伝子検査を受けたことにより家族の絆が深まった!

遺伝性疾患で難病の一つとされる病気に、ハンチントン病がある。この病気は大脳の神経細胞が変性し、意志に反して体が動く舞踏運動や認知症などの症状が現れ、40歳前後に発症することが多いとされる。母と兄がハンチントン病であったY子さんは年とともに不安がつのり、まだ30代だった10年前に遺伝子検査で発症の可能性を確かめようと、東京女子医科大学附属遺伝子医療センターを訪れた。

遺伝子医療センターでは遺伝子検査による発症前診断に当たり、「遺伝カウンセリング」を実施している。遺伝子検査で変異が見つかった場合、想像しているよりも精神的動揺が大きくなる人がまれではないからだ。そのときに必要なのが家族の支えである。そこで、Y子さんの遺伝カウンセリングにはご主人にも参加してもらうことになった。

初回の遺伝カウンセリングでは遺伝子変異が見つかった場合を想定し、Y子さんをどのように支えていくか、生活面の変化にどう対応していくか、などについて話し合われた。そしてご主人には、今後の人生設計をシミュレーションしたレポートの提出をお願いした。

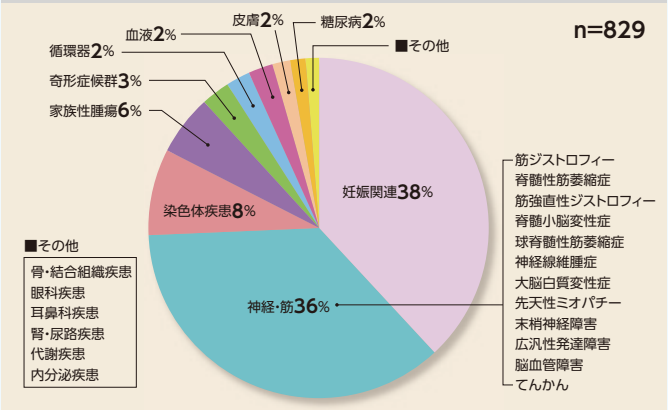
提出されたレポートは、自分が介護の勉強をしてY子さんを全面的に支えていくという決意に満ちており、家のバリアフリー化など具体的な生活プランにまで踏み込んだ感動的なものだった。そこで、遺伝子検査による「発症前診断」を学内の倫理委員会に諮問し、検査が行われた。

結果は、遺伝子変異を示す「陽性」。Y子さんは「予想していたとはいえ、2週間ほど落ち込んだ」そうだ。しかし、ご主人が最新の治療法などをインターネットで情報収集し、それを夫婦で共有するうちに「現実を受け入れ、前向きになれた」という。

その後、Y子さんは定期的に通院しているが、現在まで発症には至っていない。「遺伝子検査を受けたことで心の準備が

遺伝子医療センター所長の齋藤加代子教授。

■ 遺伝カウンセリング対象疾患（2013年）



でき、精神的なゆとりも生まれました。何よりの収穫は、主人の思いやりの深さを知り、夫婦の絆が深まったことです」と語っている。

日本の遺伝子医療専門施設の先駆けとなった遺伝子医療センター

2003年、ヒトゲノムの全DNAが確定し、遺伝性疾患の診断と治療に明るい光が差し込んだ。その翌年、女子医大は日本で初めての「遺伝子医療センター」を誕生させた。センター開設に至る経緯や役割、目的などについて、所長の齋藤加代子教授に伺った。

「私はもともと小児科医で、脊髄性筋萎縮症や筋ジストロフィーなど、遺伝性疾患の患者さんを診てきました。こうした病気の診断に以前から遺伝子検査を行ってきましたが、産婦人科をはじめ他の診療科からも、遺伝性疾患やがんなどに関する遺伝子検査の依頼や相談が年を追って増えてきました。そこで、全診療領域を横断的に診察する遺伝子医療センターをつくり、患者さんの治療とご家族の心のケアまでを包括的に行う新しい医療を実践しようということになりました」

スタート初年（2004年）の遺伝子医療センターの受診患者数は新患・再診合わせて500人弱だったが、2014年には2,700人強へと増大している。ゲノム創薬や遺伝子治療が注目されつつある中で、遺伝子医療センターへの期待も大きく高まってきているのだ。

ところで、日本人の死因第1位は30年以上、がんが占めている。よく“がん家系”というが、親から子へ遺伝する家族性がんは、がん全体の5～10%程度にすぎない。だが、乳がん、卵巣がん、大腸がん、皮膚がんなどの家族性がんは、50%の確率で遺伝する。

アメリカの女優アンジェリーナ・ジョリーさんは、2013年に乳がん予防の目的で両乳房の切除手術を行い、今年になって卵巣がん予防のため卵巣と卵管の摘出手術も受けて大きな話題を呼んだ。彼女は遺伝子検査で家族性乳がん・卵巣がん症候群であることが分かっていたため、大胆な結論が下せたのだ。

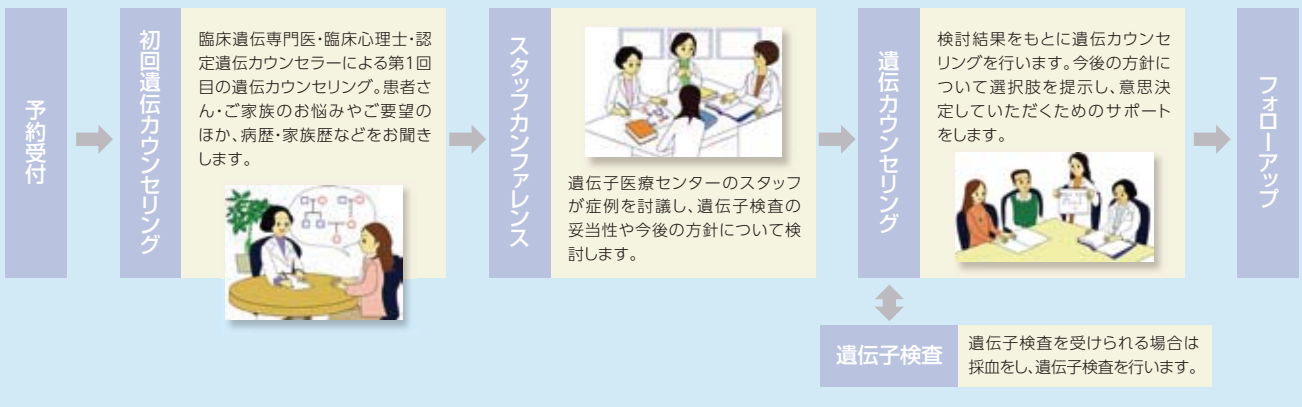
だが、日本とアメリカでは医療事情が違う。日本では大多数の人々にとって、遺伝の問題は難しくて分からないことの多い領域だ。分からないから不安や悩みがさらに増す。遺伝の問題で悩む人々は、そんな悪循環に陥っているのではないだろうか。

遺伝子医療センターがめざしたのは、そうした不安や悩みを抱えた人たちに、遺伝に関する正しい知識や情報、対応策や治療法を示し、遺伝子検査などに対して自己決断ができるようサポートし、その後の治療や精神的なケアまでを一貫して行う「遺伝カウンセリング」を創設することであった。

臨床心理士や認定遺伝カウンセラーなどによるチーム力で対応

遺伝カウンセリングでは、臨床遺伝専門医、臨床心理士、認定遺伝カウンセ

■ 遺伝カウンセリングの流れ



受診者の不安や悩みに寄り添い心のケアに努める

遺伝子医療センター 臨床心理士・認定遺伝カウンセラー **浦野 真理**

遺伝カウンセリングでは、臨床遺伝専門医と私たち臨床心理士や認定遺伝カウンセラーなどが受診者やご家族の話を伺います。臨床遺伝専門医は医学的見地から遺伝性疾患について説明し、どのような解決法があるのかを説明します。一方、臨床心理士や認定遺伝カウンセラーの役割は、受診者やご家族の心を和らげ、臨床遺伝専門医に聞きづらい問題や心配事などに耳を傾け、不安を少しでも軽くして次のステップへ踏み出せるようにすることです。

遺伝カウンセリングで難しいのは、倫理の問題が絡んでくるケースです。例えば、最初のお子さんが筋ジストロフィーなどの遺伝性疾患であった場合、二人目をどうするかは当事者のご夫婦にとって大きな問題です。二人目をあきらめることは、最初のお子さんを否定することになると苦しむ方。妊娠したが、同じ疾患を持つ子を育てる自信がないと悩まれる方。こうした方々には小児医療の最新情報や参考となる事例を紹介し、冷静な判断ができるようフォローしていきます。難しい判断を下された場合も、当事者である方々に寄り添って支えていくのが私たちの基本的な姿勢です。

ラー、看護師などで構成された医療チームが同席し、受診者やそのご家族と面談する。認定遺伝カウンセラーは、齋藤教授が理事長を務める日本遺伝カウンセリング学会と日本人類遺伝学会が共同認定する資格で、2005年に制度がスタート。資格取得者は2014年12月現在161人を数える。

「受診者が抱える悩みは一人ひとり異なります。私たちの役割は、受診者だけでなくご家族にもかかわる問題に納得のいく決断を下していただけるような環境を整備することです。まずは受診者とご家族の病歴をお聞きし、どのような解決をお求めなのかをしっかりと把握する必要があります。そのため、初回の遺伝カウンセリングは優に1時間を要します」と齋藤教授。

こうした受診者やご家族の情報をもとに、「スタッフカンファレンス」が開かれる。そこで遺伝子検査の妥当性や今後の方針などが検討される。このように、遺伝カウンセリングでは受診者やご家族の事情を聞いたうえで、遺伝子変異や遺伝の仕組み、遺伝の確率、発症時期、治療法、遺伝子検査を受ける心構えなどについて時間をかけて説明し、疑問や質問に答えながら遺伝子検査を受けるかどうか自己決断できるようカウンセリングを進めていく。

「遺伝カウンセリング受診者の約40%は、妊婦さんやお子さんの遺伝性疾患を心配するご両親です。重い問題を抱え、遺伝子検査を受けること自体に悩んでいる方も少なくありません。もし陽性だったらと考えるだけで、強いストレスを感じる方。たとえ陰性であっても、兄弟姉妹に遺伝性疾患が受け継がれている場合、自分が免れたことに負い目を感じる方もいます。それだけに、心理面でのフォローが大切になります。こうした遺伝カウンセリングは、学会や学内の倫理規定に沿って行われます」(齋藤教授)。

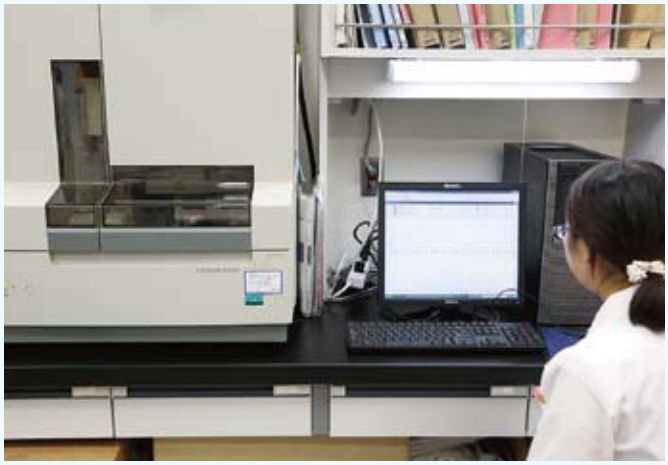
遺伝子検査の結果、陽性の判定が出た場合は必要に応じて他の診療科や医療機関、ソーシャルワーカーなどと連携して診療を進める。また発症前の場合は、発症年齢に達するまでの健康維持や生活面での指導、定期検査、さらには不安を軽減する的確なアドバイスなどでフォローしていく。そのため、面談や診療は10年、15年と長期におよぶことが多い。

将来への希望を取り戻した受診者とそのご家族

女子医大の遺伝カウンセリングへの取り組みを、患者さんやご家族はどのように受け止め、評価しているのだろうか。

仙台市在住のIさんご夫妻は、10歳になる娘さんのカウンセリングと診療のために年2回、女子医大に通っている。「娘が生後8か月の頃、細胞を切り取って検査しなければ病名は確定できないと地方の病院でいわれました。ところが女子医大では、血液による遺伝子検査で診断が

スタッフカンファレンスの模様。



遺伝子検査室の遺伝子解析装置(シーケンサー)。

先端生命医科学研究所（TWIns）の遺伝カウンセリング室における最新の細胞測定装置を駆使した研究風景。

つきました。筋ジストロフィーと分かり、以来10年近く通院しています。齋藤先生や臨床心理士の方に会い、不安や疑問に丁寧にお答えいただくと、将来への明るい希望が見えてきます」と、医療チームに絶大の信頼を寄せている。

筋ジストロフィーの息子さんとともに茨城県から通院しているCさんご夫妻は、「息子が小学3年生のときに歩けなくなり、私たちはパニックに陥りました。そのとき齋藤先生から遺伝子について分かりやすく教えていただき、冷静な気持ちを取り戻すことができました。息子の成長過程をずっと見守ってくださっているカウンセラーの方もいて、声をかけていただくだけで心が安らぎます。中学生になった息子の病状も安定しており、3か月に一度の通院を“お出かけ気分”で楽しんでいます」と、明るく語る。

32歳になるSさん（男性）は皮膚に腫瘍ができる神経線維腫症で、幼少の頃から女子医大に通院し、齋藤教授の遺伝カウンセリングを受けてきた。「この病気は現在のところ治療法がないとされていますが、齋藤先生は常に最先端の治療情報をチェックし、どこまで進んでいるかを教えてくださいます。私が前向きでいられるのは、齋藤先生が心の支えになっているからです」と、病気と闘う強い意志を示してくれた。

最先端の遺伝子医療研究で難病治療にチャレンジ

齋藤教授は難病の一つである脊髄性筋萎縮症の研究をライフワークとしている。脊髄性筋萎縮症の診断は遺伝子検査で下せるが、治療法はいまだに確立されていない。遺伝子医療センターでは、遺伝子配列に作用する薬剤の中から脊髄性筋萎縮症の治療に役立つ薬剤を見つけ出し、治療につなげる研究に力を入れている。すでに、病気の原因物質である特定たんぱく質を、患者さんから採取した血液で測定する新技術（特許出願中）の開発にも成功している。

女子医大は文科省の「難病克服!次世代スーパードクターの育成」プログラムに、信州大、札幌医大、千葉大、京都大、鳥取大とともに参加。次世代シーケンサー（DNAの塩基配列解析装置）を用いた遺伝子解析で、難病の診断を迅速かつ正確に下す研究にも取り組んでいる。

「科学技術の急速な進歩により、高度な遺伝子研究の成果が医療現場で使えるようになり、難病が治る時代の到来が夢ではなくなろうとしています。私たちの目標は、最先端の医療を診療に応用し、遺伝性疾患の治療と予防、患者さんのQOL向上に貢献すること。そして、病気の治療と心のケアを両輪とした遺伝カウンセリングで、社会の期待に応えていくことです」と、齋藤教授は遺伝カウンセリングの普及と難病治療に静かな闘志を燃やしている。

脊髄性筋萎縮症に対する薬物治療効果を解析する方法を開発

遺伝子医療センター助教 臨床遺伝専門医 小児科専門医 荒川 玲子

私は「小児期発症脊髄性筋萎縮症に対するバルプロ酸ナトリウム多施設共同医師主導治験」において、薬剤の効果を解析するサンプルセンターを担当しました。私が着目したのは、血液中のSMNタンパク質を治療効果の指標として解析する方法です。脊髄性筋萎縮症（SMA）はSMN遺伝子の変異によって生じる疾患で、SMNタンパク質の量的変化を計測することにより、薬剤の効果を判定することが目的です。

私が取り組んだのは、血球1個1個におけるSMNタンパク質を解析する技術の開発です。治験の評価において、血中のSMNタンパク質を解析する最適な方法は、世界中でまだ確立していません。この問題をクリアするためには、新しい技術を開発するしかありません。トライするからには、まだ治療法のないSMAに対する治療法開発に広く応用できる技術を確立しようと、懸命に取り組んでいます。これらの技術開発が、遺伝性疾患に対する治療法確立に貢献できるよう、さらに研究を進めていきたいと思っています。

千葉県・八千代

八千代市のランドマークとなっている八千代医療センターの入院棟。

八千代医療センター

新病棟を建設し成人医療の充実をめざす

ヘリポートを備えた新病棟（右奥）の完成イメージ。

ケヤキの緑とのコントラストが美しい外来棟。

来年6月にヘリポートを備えた新病棟が完成

東京女子医科大学附属八千代医療センター（12ページの地図Ⓐ）では目下、入院棟に隣接して新病棟を建設中である。2012（平成24）年に千葉県から146床の追加病床が認可されたことを受け、今年5月に建設工事に着手。来年6月末にヘリポートを備えた5階建ての新病棟が竣工する予定だ。これにより、病床数は現在の355床から501床へと拡大する。

八千代医療センターはオープン9年目のまだ若い病院である。一時、建設計画が頓挫したが、病院実現を願う10万人超にのぼる地元住民の署名や千葉県内の医師会からの強い要望に応え、東京女子医大と八千代市が病院建設・運営に関する基本協定を締結。2004（平成16）年に千葉県から病院開設の許可が下り、翌年に起工式を行って2006（平成18）年9月に建物が竣工。そして同年12月にオープンの運びとなった。

スタート当初の稼働病床数は150床だったが、半年後に264床、2008（平成20）年4月からフル稼働の355床となり、さらに来年からは病床数が一気に4割強も増加することになるわけだ。

人口分布の二極化に対応した医療体制を構築

千葉県船橋市の西船橋駅と八千代市の東葉勝田台駅を

結ぶ東葉高速線が1996（平成8）年に開業したことにより、沿線にはマンションや戸建て住宅が建ち並び、若い世代の人口流入が続いた。こうした背景から、この地域では小児・周産期医療の供給が不足し、救急医療体制も不十分だった。八千代医療センターがその大きな担い手と位置づけられたことはいうまでもない。

一方、八千代市内には京成本線沿いを中心に昭和40年代から50年代前半にかけて造られた公団住宅（当時の日本住宅公団が供給した住宅）がいくつも立地しているように、古くからの既存住宅も多い。このため、八千代医療センター周辺では熟年世代の住民の高齢化も加速している。つまり、人口分布が若年世代と高齢世代に二極化しているのである。

このような地域特性に対応すべく、八千代医療センターでは新病棟の建設を契機に、成人医療も積極的に推進していく方針を打ち出している。新井田達雄病院長は、「小児・周産期医療に強みを発揮しているという特徴を生かしながら、さらにその充実を図り、小児救命センターとして全国9番目の拠点病院をめざします。加えて、心血管疾患、脳血管疾患、がん、糖尿病などの成人医療を重点的に整備し、病棟を再編していきます」と語る。

総合周産期母子医療センターをはじめ臨床研修病院、地域災害拠点病院、がん診療連携協力病院、DMAT指定医療機関などに指定されている八千代医療センターは、オープン10年目に当たる来年の新病棟開設と成人医療の強化により、高度急性期病院・地域中核病院として新たな節目を迎えようとしているのである。

地域住民との交流を深める二大イベント

八千代医療センターでは毎年、「やちよ健康フェスタ」と「ウィンターフェスタ」を開催している。「やちよ健康フェスタ」は、中高生を対象とした医師体験や病院内見学、オープンホスピタル、健康セミナーなどのプログラムで構成されるイベントで、毎年9月に実施。「ウィンターフェスタ」は、コンサートやミュージカルを交えた健康公開講座で、毎年2月に行われる。いずれも、約400人の会員から成る「八千代医療センターを支持する市民の会」という組織の協力を得た催しで、文字どおり地域に密着した“市民との交流の場”となっており、どちらのイベントも多くの人たちで賑わう。

八千代医療センターはこれまで、『DOCTORS 最強の名医』シリーズをはじめとする数々のテレビドラマの舞台となってきたことでも知られる。こうした一面も市民にとっては大きな誇りであり、八千代医療センターがより身近な存在として親しまれている要因となっているようだ。

外来棟と入院棟を結ぶ2階連絡通路。

明るく楽しい雰囲気の小児科外来の待合室。

高度な設備と医療スタッフを備えたPICU（小児集中治療室）。

昨年導入された最新鋭のCT装置。

外来入口に通じる象徴的な通路。

八千代医療センター周辺散歩

京成バラ園

1万株のバラが咲き誇る

八千代市の観光名所ナンバーワンといえば、京成バラ園であることに異論をはさむ余地はないだろう。メイン施設のローズガーデンに植栽された1,500品種・1万株におよぶバラが咲き誇った景観は、まさに“ワンダフル”。見頃となる5月中旬から6月上旬にかけては連日、さまざまなバラの色彩と優雅な香りを楽しむ人たちで園内が埋め尽くされる。バラだけでなく四季折々の草花や樹木も植えられているため、年間を通して楽しめるスポットでもある。園内にはレストランやカフェも併設されており、ハーブ野菜などを使った料理や名物の「バラのソフトクリーム」を味わうことができる。（地図Ⓑ、問い合わせ先：047-459-0106）

みごとに咲き誇ったローズガーデンのバラ。

園内にあるレストラン「ラ・ローズ」。

人気の「バラのソフトクリーム」。

◆グルメスポット

さわ田茶家　八千代を代表する蕎麦の名店

ひときわ目を引く格調の高い純和風の建物は、東久邇宮殿下（戦後最初の首相）の別邸を移築したものだ。店内は、ノスタルジックな和の空間に洋風のしゃれたイスとテーブルが並び、趣のある雰囲気を醸し出している。この席で、細やかに盛られた酒肴をつまみに地酒を楽しみ、締めに食する手打ち蕎麦の味は格別。蕎麦通をうならせること請け合いだ。季節の素材を使った懐石料理も評判で、法事や祝事、各種宴会などにも利用されている。また、音楽イベントも行うなど、「地域交流の場、情報発信の場としても機能させていきたい」と、澤田政道社長は意気盛んである。

●住　　所：八千代市萱田町595
●電　　話：047-486-3311
●営業時間：11:00～22:00
●定 休 日：月曜日（祝日の場合は火曜日）
●地　　図：①

人気メニューの「天せいろ」。

東久邇宮殿下の別邸だった建物。

和洋折衷の趣のある店内。

彩り豊かな「酒肴六種盛合わせ」。

新川千本桜

県内有数の“桜の名所”

八千代市内には南北に新川（印旛放水路）が流れているが、これをまたぐ新川大橋付近から北へ約9㎞の間の流域には、優に1,000本を超える桜の木が並んでいる。2001～2003（平成13～15）年度にかけて、新川流域に桜を咲かせようと植栽されたものだ。それがみごとに成長・開花し、今では県内有数の“桜の名所”として広く知られるようになった。新川は市民に潤いをもたらす憩いの場となっているが、毎年桜の季節になると多くの花見客が訪れる観光スポットにもなっているのだ。（地図Ⓒ）

新川流域に延々と続く桜並木。

「もちぶた炙りチャーシューバージョンとん汁」と直径2mもの源右衛門鍋。

源右衛門祭

鍋グランプリの「とん汁」が目玉

上述の新川は、印旛沼の治水を目的として開削された水路であるが、その工事を最初に手がけたとされるのが、江戸時代に当地で名主を務めていた染谷源右衛門である。源右衛門祭は、それにちなんで毎年4月に八千代総合運動公園で開催される一大イベントである。この祭りの名物は、直径2mもの大きな源右衛門鍋によってつくられる「とん汁」。これにチャーシューが入った「もちぶた炙りチャーシューバージョンとん汁」が、今年1月に行われた「ニッポン全国鍋グランプリ」でみごと優勝した。香ばしいチャーシューが食をそそるこのB級グルメを、祭り会場へ足を運んでぜひご賞味あれ！（地図Ⓓ、写真提供：源右衛門祭実行委員会事務局、問い合わせ先：047-483-1771）

ラ・ターブル

丁寧な味が自慢のビストロ

●住　　所：八千代市ゆりのき台4-7-5-B1
●電　　話：047-484-6358
●営業時間：11:00～14:30
　　18:00～22:30
●定 休 日：月曜日
●地　　図：②

人気No.1の「イベリコ豚のグリエ」。

カジュアルな雰囲気の店内。

正統派のフレンチをカジュアルに楽しめるビストロである。「基本は丁寧なダシづくりから」をモットーとする佐藤典久オーナーシェフは、ダシづくりに8時間を費やし、コンソメはさらに4時間かけてつくる。そして旨みを凝縮させ、素材をプラスしながらソースを仕上げる。伝統をベースにしながらも、地元の野菜や季節の食材を使って常に新しい味を追求し続け、素材が最もおいしくなるよう火を加減しながら料理をつくる。人気メニューは「イベリコ豚のグリエ」。独自の粒マスタードソースで、たっぷりの野菜とともに食べるイベリコ豚の味はさすがである。

菓匠 白妙（しろたえ）

和菓子の巨匠の逸品を味わう

●住　　所：八千代市ゆりのき台4-1-14
●電　　話：047-489-1200
●営業時間：9:30～19:00
●定 休 日：水曜日
●地　　図：③

しぼりたての生乳をたっぷり使い、黄味餡をやわらかい餅で包んだ「白牛酪餅（はくぎゅうらくもち）」がこの店の看板商品。八千代市に生まれ育ち、「TVチャンピオン」全国和菓子職人選手権で8回も優勝した高橋弘光オーナー創作の逸品である。赤児の肌のようなきめ細かなモチモチ感と上品な甘さは感動もの。一度口にしたら忘れられない味だ。雪・月・花をあしらった遊び心のある「クリームうさぎ」という大福も人気商品。クリーミーな餡が特徴のこの和菓子は、冷やして食べるのが美味。ひんやりとした食感は、老若男女を問わず多くの人の口を楽しませている。

店内はモダンな和のテイスト。

看板商品の「白牛酪餅」（手前）と「クリームうさぎ」。

東京女子医科大学腎臓病総合医療センターの泌尿器科は、腎移植で世界的な評価を得るとともに、腎がん・前立腺がんの治療に手術支援ロボットを活用してハイレベルな医療を提供している。それぞれの最前線を見てみよう。

開腹された患者さんに腎臓を移植しているところ。

腎移植・泌尿器腫瘍治療で我が国屈指の実績を誇る泌尿器科

ドナーから摘出されたばかりの腎臓。

腎臓摘出は腹腔鏡下手術によって行われる。

腎移植

圧倒的な症例数と治療実績で世界から高評価

東京女子医科大学病院中央病棟2階の第6・第7手術室。生体腎移植は、室内を行き来できる2つの手術室が使用される。一方の手術室では腎臓提供者（ドナー）からの腎摘出、もう一方ではそれを受ける患者さん（レシピエント）への腎移植が行われる。

5月某日、50代の男性患者さんへの生体腎移植が実施された。ドナーは親族の60代の男性。午前9時15分、第6手術室においてドナーからの腎臓摘出が腹腔鏡下手術によって始まった。そして、1時間半後の10時45分に腎臓を摘出。179gの決して小さくはない腎臓を、開腹せずに摘出する腹腔鏡下手術のみごとな技を目の当たりにした。

摘出された腎臓はただちに隣の第7手術室へ持ち運ばれ、移植するための処置が施された。11時、すでに開腹されていた患者さんの右下腹部への腎移植がスタート。40分後に腎動脈の吻合が終わり、その後、尿管を膀胱につないで手術が

■ 腎移植件数の推移

腎移植術	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
生体腎移植術	86	81	86	79	93
献体腎移植術	8	8	10	6	4
自家腎移植術	2	3		2	2
腎摘出術(ドナー)	86	81	86	79	93

完了したのは午後1時前だった。腎臓摘出から移植までに要した時間はざっと3時間半。想像していたよりもはるかに短いものだった。

腎移植は、末期腎不全の唯一の根本治療法といえるものだ。親や兄弟姉妹などの血縁者、配偶者から腎臓の提供を受けて移植するのが生体腎移植である。腎臓は1人に2つあり、1つになっても機能には問題がないため、1つを摘出して患者さんへ移植することが可能なのだ。一方、脳死または心肺停止となった人から腎臓の提供を受けて移植するのが献体腎移植である。さらに、腫瘍や結石などの病変を持つ腎臓を体外に取り出し、再建して再び体内に戻す自家腎移植もあるが、この移植例はそれほど多くはない。

現在、我が国には約31万人の腎不全患者さんが透析療法を受けている。このうち、腎移植を受けたいと願っている患者さんは1万数千人を数える。だが、実際の腎移植件数は年間約1,600件。透析患者さんのおよそ200人に1人という割合だ。また、このうち献体腎移植の件数はわずか200件にすぎない。臓器の提供があまりにも少ないからだ。腎臓病総合医療センター泌尿器科の田邉一成教授(女子医大病院・病院長)は次のように話す。

「アメリカでは生体・献体合わせて年間約1万7,000件の腎移植が行われています。日本はアメリカの3分の1の人口ですから、その比率でいけば年間5,000件の腎移植があってもいいはずです。仮に献体ドナーが1,000人出れば、移植できる腎臓が2,000個になりますから、生体と合わせて年間3,500人くらいの患者さんが腎移植を受けることができる計算になります」。

女子医大病院が最初に腎移植を行ったのは、今から44年前の1971年である。その後、東間紘教授が腎移植術の確固とした基盤を築き、2006年からそれを受け継いだ田邉教授がさらに進化・発展させ、女子医大病院を世界有数の腎移植施設として広く知らしめるに至っている。「我々は年間約100件の腎移植手術を行っていますが、我が国の病院の中ではもちろんトップです。また、治療成績を表す10年生着率は95%で、世界でも断トツです」と田邉教授は胸を張る。

英語で行われているカンファレンス。

泌尿器科の田邉一成教授(女子医大病院・病院長)。

さらに、血液不適合移植に先鞭をつけたのも女子医大病院である。主に夫婦間で行われる血液不適合移植は、腎移植全体の約3割を占めるが、その生着率も90%超と高く、症例数・治療成績とも世界を大きくリードしている。

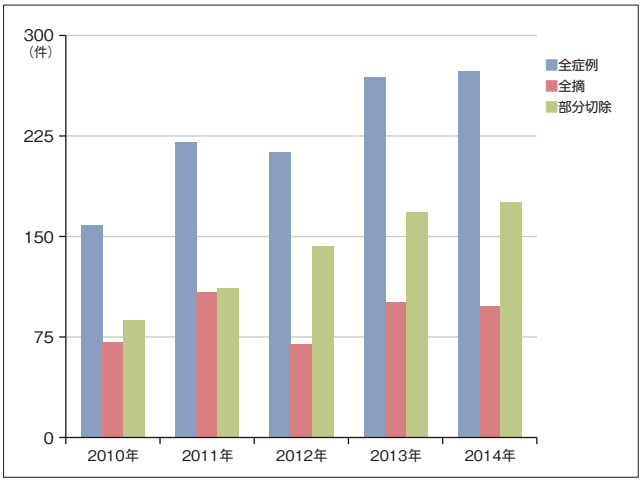
こうしたことから、泌尿器科には世界各国から研修や見学のために訪れる医療スタッフが引きも切らない。このため、科内のカンファレンスは英語で行っており、外国人からは大いに感謝されているとのことだ。

腎がん

群を抜く手術件数で他の病院を大きくリード

女子医大病院は“腎がんに強い病院”としても知られる。腎がんの手術件数は年間約270件にのぼるが、この数字は

■ 腎がん手術件数の推移



「ダビンチサージカルシステム」による前立腺がんの手術風景。

操作ボックス（コンソール）でロボットアームを遠隔操作。

モニターを見ながら手術の進行状況を確認。

日本の病院の中で群を抜くものである。第2位の病院の年間手術件数が100件強であることからも、突出していることが分かる。単に手術件数が多いというだけでなく、早期の腎がんや小径の腎がんの場合は、腫瘍とその周辺のみを切除する「部分切除術」を推進していることも特徴だ。ちなみに、過去3年間の部分切除術の割合は60%超となっている。また、腹腔鏡下手術を積極的に取り入れ、患者さんの負担を少なくする低侵襲化も進めている。腎臓全摘手術においても、ここ数年は開腹手術より腹腔鏡下手術のほうが多い。

さらに、2013（平成25）年からは手術支援ロボット「ダビンチサージカルシステム」（以下ダビンチ）を駆使した部分切除術が行われるようになった。同年のダビンチによる手術件数は34件だったが、昨年は75件へと倍以上増加した。まだ医療費が保険適用の対象になっていないため患者さんの費用負担は大きいが、手術を待ち望んでいる患者さんが少なくないためコンスタントに週2～3回のペースでダビンチによる手術を行っており、今年は100件の大台を突破してくるのは間違いない。保険が適用されるようになれば、ダビンチによる腎がんの部分切除術はさらに増えてくるだろう。

前立腺がん

ロボットによる手術の推進で良好な成績を実現

心地よいポップスのBGMが小さく流れる中、ときおり「カシャ、カシャ」という軽快な音が鳴り響く。ここは中央病棟2階のダビンチが設置されている手術室。青森からやってきた前立腺がん患者さんの手術が行われているところだ。「カシャ、カシャ」という音は、ロボットアームを操作するコンソールの足元のペダルを操作したときに発せられるものである。患者さんの腹部に開けられた穴には3Dカメラと手術用鉗子が挿入され、コンソールに座った田邉教授が3D画像を見ながらロボットアームを遠隔操作する。田邉教授はダビンチ手術の先駆者でもある。

ダビンチ手術の熟達者・飯塚淳平助教。

モニターに映し出された鮮明な画像を目にすると、患部が正確に切除されていくのが見てとれる。まるでオペレーターが患者さんの体の中に入り込んで手術を行っているような錯覚を覚える。通常、ダビンチによる前立腺がん手術は1.5～2時間で終わるが、この日の患者さんはリンパ節の切除も行ったため手術時間は3時間を要した。

女子医大病院にダビンチが導入されたのは2011（平成23）年。その年の8月に前立腺全摘術の一例目が行われ、これまでのダビンチによる手術件数は約250件を数える。田邉教授とともにダビンチ手術の指導的立場にある飯塚淳平助教は、「今では前立腺がん手術のほぼすべてをダビンチによって行っています。おおむね週2回のペースで行い、年間の手術件数は80件程度となっています」という。

ダビンチは腹腔鏡を発展させたものといえるが、腹腔鏡による手術は全般的に出血が少なく、術後の回復が早いというメリットがある。出血量は開腹手術の1～2割にすぎないという。加えてダビンチは、「ロボットアームの手術用鉗子先端部を細かく動かすことができるうえ、手ぶれを自動的に補正する機能もあるため、より精緻な手術操作が可能です」と飯塚助教は指摘。さらに、「これまでの症例はいずれも術後の経過が良好で、手術の成績は従来の方法に比べてダビンチのほうが良いという結果が出ています」とのことだ。

国際交流（看護学部）

茶道を通して日米の学生が交流を深める。

文化交流を含む充実したプログラムが自慢

汗ばむほどに晴れわたった5月下旬の某日。静岡県掛川市の東京女子医科大学大東キャンパスは、アメリカからやってきた女子学生と交流する看護学部1年生の明るい笑顔が絶えなかった。

茶道の奥深い所作と作法を体験

この日、東京女子医大看護学部と国際交流協定を結んでいる米アルバーノ大学（ウィスコンシン州ミルウォーキー）の学生たちが大東キャンパスを訪れ、文化交流の一環として茶道と書道を体験。

自分の名前を漢字で記したマリアさん（右）。

茶道には全員が浴衣姿で臨んだ。

「茶道には“一期一会”という教えがあります。茶をともにするのは一生に一度と心得て、主客とも誠意を尽くす心構えを意味しています」という茶道の講師の話を神妙に聞いたあと、いよいよお茶会がスタート。まず菓子が配られ、茶道の素養のある学生から所作・作法を聞きながらお点前を受けた。さすがに畳の上での正座ではなく、イスに座ったままでのお茶会であった。

会場には大東キャンパスの学生20人以上が見学に詰めかけた。彼女らにも菓子とお茶がふるまわれ、アルバーノ大学の学生とともに茶道を学んだ。

「アメリカでも日本茶を楽しめますが、茶道を経験したのは初めてです。茶碗を回すという動作には、茶碗の正面を避けて口にするためといった意味があることを知り、奥が深いと思いました」

「実際に茶道を体験してみると、日本人の“おもてなし”の心がよく分かります。そして、お茶はとてもリラックスさせてくれました」

「私は日本の文化に興味がありますので、茶道がプログラムに組み込まれていたのはラッキーでした。一期一会の教えも、なんとなく理解できたような気がします」

茶道を体験したアルバーノ大学の学生たちからは、こういった声が聞かれた。また、浴衣がお気に入りだという学生は、

茶碗を回す所作を女子医大の学生が指導。

■国際交流協定締結校と累計派遣・受入学生数(2015年6月現在)

大　学　名	国　名	派遣学生数（累計・人）	受入学生数（累計・人）
ハワイ大学	アメリカ	174	1
アルバーノ大学	アメリカ	34	39
ハワイパシフィック大学	アメリカ	120(10)	9
梨花女子大学	韓国	26(6)	20(2)
	合　計	354(16)	69(2)

※交流協定締結はハワイ大学2002年度、アルバーノ大学2006年度、ハワイパシフィック大学2009年度、梨花女子大学2011年度。ハワイ大学との協定は2009年度に終結。カッコ内は大学院生の数。

「家族へのおみやげとして、すでに扇子とともに浴衣を手に入れました」という。

書道初体験で趣のある書を披露

一方の書道は、アルバーノ大学の学生一人ひとりの名前を、漢字を当てて表記し、それぞれがその文字を書くことにチャレンジするという形で行われた。例えば、「エレン」という学生の名前は「笑恋」、「サバ」という名は「茶葉」、「マリア」は「麻梨亜」といった具合だ。

いずれも女子医大の学生たちが考え出したものだが、「エレン」を「笑恋」と表記するところなどはなかなかしゃれている。また、「サバ」という名を「茶葉」としたのは、いかにもお茶の産地・掛川らしく、お茶摘みを年中行事としている大東キャンパスの学生ならではのアイデアだ。その説明を受けたサバさんは、「とても光栄です」と、深くうなずいていた。

書道初挑戦にもかかわらず、なかなか上手に「麻梨亜」と書いた当のマリアさんは、「やはり漢字は難しいですね。すらすら書くというわけにはいきませんでした」と謙遜する。とはいえ、その書には人を引きつける独特の趣があり、とても書道が初めてとは思えなかった。聞けば、彼女はアートや造形に興味を持っているという。おそらくそうした感性が書に反映されたのであろう。

「笑恋」という漢字のそれぞれの意味を知ったエレンさんは、文字どおり笑顔で書道にチャレンジ。それを見守っていた女子医大の学生たちは、力強く書き上げた「笑恋」の文字に喝采を送っていた。

実りある英語でのディスカッション

アルバーノ大学の学生たちが教員とともに来日したのは5月24日の夕方。毎年行われている女子医大との国際交流が目的で、女子医大からも毎年8月に4年生の代表者6人がアルバーノ大学に派遣されている。

来日した一行は翌25日午後に河田町キャンパスを訪れ、夜は女子医大の敷地内にあるレストランで行われたウェルカムディナーに出席。8月にアルバーノ大学を訪れる女子医大の学生も参加し、交流を図った。ディナーには寿司や蕎麦も用意され、アルバーノ大学の学生たちは日本食も楽しんだ。その中の一人は、「シカゴやミルウォーキーでもお寿司を食べられますが、やはり日本で食べるお寿司の味は格別です」と頬をゆるめる。

余談だが、この日の午後2時半前、埼玉県北部を震源とする最大震度5弱の地震が発生。東京新宿区は震度4を記録し、河田町キャンパスも大きな揺れに見舞われた。地震を知らないアルバーノ大学の学生たちにとっては、来日早々のまさかのサプライズ。一様に恐怖と不安を覚えたようだ。

26日の午前中は、2年生の英語の授業に参加。いくつかのグループに分かれ、英語によるディスカッションが展開された。午後は病院の見学とTWIns(先端生命医科学研究所)視察などに時間が割かれた。翌27日は女子医大とアルバーノ大双方の教授による講義を受講し、3年生の英語の公開授業に参加。そして28日に掛川へ移動したのである。

大東キャンパスでは1年生全員が10

交換留学生同士が寿司を囲んで歓談。

吉岡俊正理事長・学長を交えて談笑する日米の教員たち。

河田町キャンパスでのグループディスカッション。

楽しみながら英語を学ぶ大東キャンパスの学生たち。

グループに分かれ、各グループにアルバーノ大学の教員・学生が一人ずつ加わって英語によるセッションが行われた。そのあと、冒頭で紹介した茶道と書道が行われたわけである。

一行はその後、広島と京都を訪れ、再び東京に戻って訪問看護ステーションなども見学し、6月5日に帰国の途についた。既婚者で子を持つ親でもある学生の一人は、「アメリカでは私のように子どもがいても再び大学へ通ってキャリアを積む人が少なくありません。そこが日本と大きく違うところでしょう。女子医大の看護学部の学生は違った環境の2つのキャンパスで学ぶわけですが、このシステムはとても良い効果をもたらしていると思います」と語ってくれた。

ミッションを持つ必要性を痛感

看護学部ではハワイパシフィック大学、韓国の梨花女子大学とも国際交流協定を結んでおり、毎年7月にハワイパシフィック大学短期研修、3月に梨花女子大学短期研修が実施されている。ハワイパシフィック大学短期研修は1～3年生を主体としたもので、学生に人気が高く、2014年度の参加者は32人にのぼった。今年度も19人の参加を予定している。梨花女子大学短期研修は2011年度からスタートし、これまで累計で26人が参加、受入学生数も20人を数えている。

アルバーノ大学短期研修を含め、2014年度に派遣された学生たちの声を拾ってみよう。ハワイパシフィック大学短期研修に参加したN.K.さんは、「スキルスラボではシミュレーションモデルを用いて脈拍の触知や呼吸音の聴取など臨床技能のトレーニングを行うことができ、さまざまな疾患や症状の特徴をつかむことができました」と、スキルスラボの充実ぶりを評価する。

アルバーノ大学短期研修に参加したS.H.さんは、「現地の多くの学生たちが、学内でキャリーケースや大きなリュックサックを持ち歩いているのが印象的でした。分厚い教科書や長い時間をかけて予習した資料などを用意して授業に臨むからです。そういう姿勢にはとても刺激を受けました」と、日本の大学との違いを指摘する。

大学院生のA.O.さんは梨花女子大学短期研修に参加し、「梨花の学生はプレゼンテーション能力が高く、課題への取り組みや講義への事前準備が真摯で、世界のリーダーをめざすという意識を持ちながら学んでいることに感銘しました」という。そして、「自分がなすべきミッションを明確に持つ必要性を痛感しました」と、研修の成果に言及してくれた。

エレンさんの書道の出来映えを笑顔でたたえる。

ハワイパシフィック大学での研修のひとコマ。

梨花女子大学でチマチョゴリを着て交流。

健康維持・予防セミナー

ストレス

腹部を手で触れて診察。漢方では脈の数や強さを診察することも含めて「切診」という。

漢方によるストレス・ケアのすすめ

JR田端駅前のビル内にある東京女子医科大学東洋医学研究所クリニック。ここは漢方によるストレス不調の治療に定評があり、待合室は連日、遠方からも訪れる患者さんたちでいっぱいである。

□健診では特に問題はなかったが…

健康診断では何も異常がないのに、「疲れやすい」、「かぜをひきやすい」といった不調を訴える人が少なくない。働き盛りの40代後半の男性Kさんもそんな一人で、奥さんのすすめもあって東洋医学研究所クリニックを訪れた。対応したのは同研究所副所長を務める木村容子准教授。ベストセラーとなった『女40歳からの「不調」を感じたら読む本』や『ストレス不調を自分でスッキリ解消する本』などの著者としても知られる。

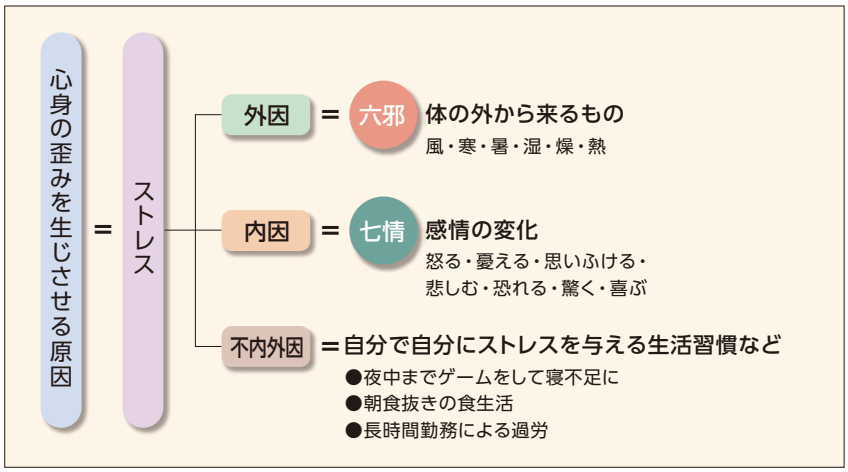
木村准教授はまず問診を行い、Kさんは「夕食が夜10時前後になることが頻繁」、「朝食を抜くことが多い」、「忙しくなると頭痛・腹痛に襲われる」、「休日はゴロゴロしているが疲れがとれない」、「運動はしていない」といったことが分かった。次に、Kさんの舌の状態（望診）、脈や腹部の診察（切診）をすると、消化器への負担を示唆する反応も認められた。

これらの診察の結果、Kさんは「気（エネルギー）」が衰えている状態であることが判明した。仕事の忙しさや人間関係、

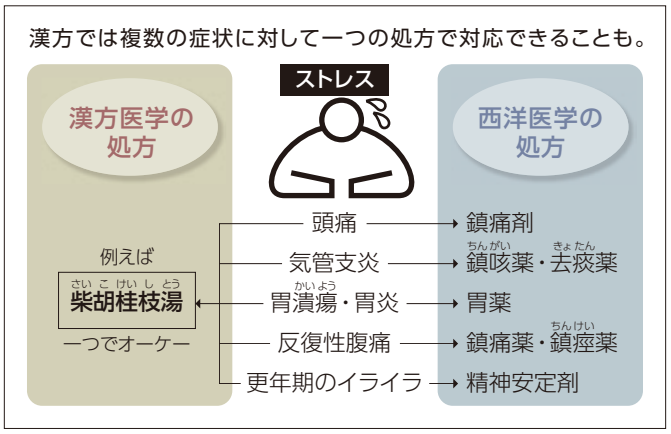
図表① ■ストレスが原因で起こりうる疾患（心身症）

神経系	頭痛、自律神経失調症など
循環器系	本態性高血圧、不整脈など
呼吸器系	気管支ぜんそく、過換気症候群、神経咳嗽など
消化器系	慢性胃炎、胃・十二指腸潰瘍、過敏性腸症候群など
内分泌系	肥満症、糖尿病、甲状腺機能亢進症など
耳鼻科系	メニエール病、咽喉頭異物感症など
産婦人科系	月経困難症、月経不順、月経前症候群、不妊症、更年期障害など
皮膚科系	皮膚掻痒症、円形脱毛症、アトピー性皮膚炎、多汗症、慢性じんましんなど

図表② ■ストレスをもたらす外因・内因・不内外因



図表③ ■漢方医学の処方



漢方薬となる原料の数々。

不規則な食生活などがストレスとなってエネルギーを消耗し、気持ちまで滅入っていたのである。

□自分で自分にストレスを与える

ストレスは、医学的には「生体に何らかの刺激が加えられたときに生じる生体側の歪み」と定義づけられている。もともと人間の体には、ストレスを受けても歪まずに体内環境を一定に保ち続ける機能が備わっている。この機能を「ホメオスタシス」(恒常性維持機能)といい、「神経系」「内分泌系」「免疫系」の3つから成り立っている。

神経系は、呼吸や心拍、循環、消化など生命を維持するために必要な働きを持つ神経の流れ。内分泌系はホルモンの働きのことで、環境や体調の変化に体をうまく順応させる役割を果たす。そして免疫系は、体が外界からのウイルスや細菌を攻撃・殺傷して自分の身を守る力のことである。

東洋医学研究所副所長の木村容子准教授。

このホメオスタシスがきちんと機能していれば、多少のストレスがかかっても健康な状態を保つことができる。しかし、3つの仕組みのバランスが崩れるほどの強いストレスがかかると、体に歪みが生じて不調を覚える。そして、不調を放っておくと図表①のような病気の域にまで悪化してしまう。

漢方では、心身の歪みを生じさせる原因を「外因」「内因」「不内外因」の3つに分けている(図表②参照)。外因とは体の外から来る原因のことで、気候の変化など6つの環境要因を指す。いずれも心身に害を及ぼすことから「六邪」と呼ばれる。内因とは7つの感情の変化を指し、「喜ぶ」といったプラスに思える感情も過度に及ぶとストレス要因になる。

不内外因は寝不足や不摂生な食生活、過労などを指す。これらはまさに、自分で自分にストレスを与えている生活習慣といってよい。つまり、“自分ストレス”によって不調を引き起こすわけである。

□養生することの大切さを知る

さて、冒頭のKさんに対して木村准教授は、胃腸の働きを整え頭痛や腹痛などにも有効な「柴胡桂枝湯」という漢方薬を処方した。西洋医学の処方では症状ごとにいくつかの薬が処方されるのが一般的だが、漢方医学ではKさんの例のようにたった1つの薬だけで対応するというケースも少なくない(図表③参照)。

木村准教授はKさんに養生法(生活の改善)もアドバイスした。「気を補うのは食事と睡眠」、「気を体全体に巡らせるには運動が重要」という基本的な考えのもと、「夕食から就寝まで3時間は空ける」、「夕食が遅くなる場合は軽めに抑えて安眠を心がけ、朝食をしっかりとる」、「休日には軽い運動をして汗を流す」よう促した。

東洋医学研究所では患者さん自身が自覚症状を評価するシステムを独自に開発し、診察に活用している。自覚症状の頻度を「0.なし、1.まれに、2.ときどき、3.ほぼいつも、4.いつも」、程度を「0.なし、1.わずかに、2.少し、3.かなり、4.非常に」とそれぞれ5段階で表し、患者さんに来院のつど評価してもらうというものだ。

Kさんは初診時、「疲れやすい」、「かぜをひきやすい」、「眠りが浅い」、「食後に眠くなる」、「やる気が出ない」などの自覚症状がいずれも「3〜4」の評価だった。だが、漢方薬の処方と木村准教授のアドバイスによって1カ月後に頭痛や腹痛がなくなり、3カ月後にはかぜもひかなくなってやる気が出てきた。自覚症状の評価もすべて「0〜1」に改善したという。

Kさんは、「養生法の実践によって自分の生活の問題点と改善点が分かり、体調を大きく崩すことがなくなりました」と、毎日元気に働いているとのことだ。

東洋医学研究所では現在、漢方薬が自律神経の働きに与える影響の臨床研究を実施しています。詳しくは、TEL.03-6864-0821(代表)までお問い合せください。

ふれあいレポート

わかまつ学級

入学式での歓迎アトラクションシーン。

楽しく勉強しながら入院生活を送る子どもたち

1人の児童のために行われた入学式

春の温かい日差しが差し込む第1病棟3階の一角に「君が代」が流れた。東京女子医科大学病院の院内学級「わかまつ学級」で入学式が始まったのだ。入学したのは福島県郡山市からやって来たS君。脳腫瘍の治療のために女子医大病院に入院していたのである。

わかまつ学級は、新宿区立余丁町小学校の特別支援学級として2013(平成25)年春に開設された。女子医大病院は小児医療についての総合的な診療の実践をめざして小児総合医療センターを設けるとともに、小児入院患者さんへの学習環境の提供と退院後の復学に向けた支援を目的に小児院内教育支援室を設け、わかまつ学級の誕生へとつなげたのである。

入学式には余丁町小学校の校長先生も出席して式辞を述べ、S君に教科書を授与。担任の先生も紹介され、録音された在級生の歓迎の言葉も流された。さらに、歓迎アトラクションとして「世界中のこどもたちが」という曲を在級生のMさんが手話を交えながら披露した。S君は終始、嬉しそうな表情を浮かべ、花束や通学用の黄色い帽子を渡されると目を輝かせていた。

入学式の模様を見守っていたS君の保護者は、「この子のためだけに入学式を行っていただき、とても感謝しています。今までこのような式には参加することができませんでしたので、感激もひとしおです」と目をうるませていた。

友だちができ学習の遅れも防ぐ

入学式から1週間後、わかまつ学級には元気なS君の姿があった。この日、S君は絵本で国語の学習をしたあと、こいのぼりづくりに挑戦。教室では6年生の女子児童も漢字の勉強に取り組んでいた。Mさんは体調がすぐれないため教室に来られなかったが、先生が病棟へ赴いてベッドサイドで授業をする予定だという。

わかまつ学級は2013年のスタート初年度、月平均8人の生徒数で推移し、27人が在籍した。2年目の2014年度は、月平均生徒数が5人強で、在籍者は27人を数えた。

「先生や友だちと一緒に過ごすことによって子どもが精神的に安定し、豊かな気持ちで入院生活を送れたと思います」「友だちと接することができ、子どもらしい笑顔が増えてきました」「学習の遅れを防ぐことができて、親としてとても安心しました」「教室は明るい雰囲気で、図工の時間やいろいろな行事もあって、子どもはさぞかし楽しかったことと思います」「院内スタッフのみなさんが、体調管理に気をつけながら学級生活に参加できるよう配慮していただいたことに、深く感謝しています」。

わかまつ学級に在籍した児童の保護者からは、このような声が寄せられている。

通学用の黄色い帽子をかぶって入院中の病棟から教室へ向かう。

授業中のひとコマ。壁の「わかまつ学級」の文字は書道家・武田双雲氏の手による。

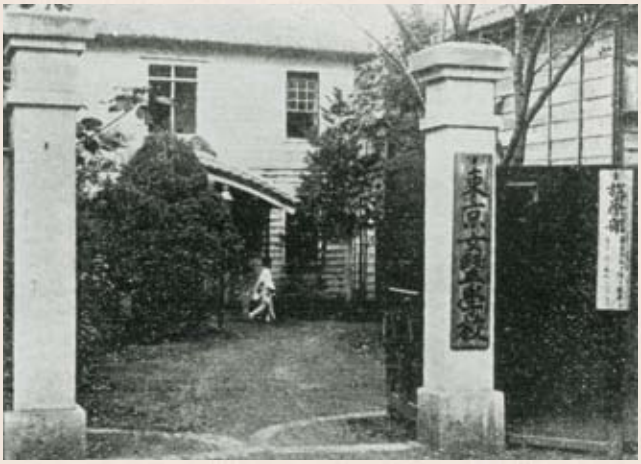
——その4 河田町校舎——

女医学校を河田町へ移し寄宿舎も新築

明治33(1900)年12月に飯田町の東京至誠医院(現在の千代田区九段北一丁目)の一室を教室にして開校した東京女医学校(のちの東京女子医科大学)は、翌年5月に市谷仲之町へ移った。そこは政治家が住んでいた屋敷で、少しは学校らしくなったものの、設備や授業はまだまだ満足のいくものではなかった。そのうえ家賃がかさんだため、経営は火の車。彌生は年末に郷里の父からお金を借り、なんとか年を越すことができた。

父からは、「郷里へ戻ってきて医院を開業したらどうか」とすすめられたが、「東京女医学校は日本の女性医師の将来のためにつくったもの。死んでもつぶすわけにはいかない」と、彌生は決意を新たにした。

そうした中、彌生は子を授かり、明治35(1902)年6月に長男・博人を出産した。荒太・彌生夫妻はもとより、寄宿生にとっても博人の誕生は大きな喜びであった。彌生は育児に追われながらも、東京至誠医院での診察や往診を休むことなく、医師としての仕事も精力的にこなした。幸い博人は彌生を手こずらせることもなく、すくすくと育った。



河田町に移転後の明治39(1906)年当時の東京女医学校。

そんなある日、彌生は学生から「獣医学校が麻布へ引っ越して空いているようです」と知らされた。獣医学校は瀟洒な洋館で、近くの河田町に立地していた。市谷仲之町の建物は普通の日本家屋。校舎というにはほど遠いものであり、学生たちはもっと学校らしい校舎で勉強したいと願っていた。

その希望を叶えてあげようと、彌生はさっそく調査に乗り出した。獣医学校の敷地・建物の売値は1,200円。そのうち900円が抵当に入っており、それを肩代わりすればとりあえず300円で手に入れることができる。彌生はどうにか200円をかき集め、残る100円は金融業者から借りて300円を用意し、獣医学校跡を入手。明治36(1903)年3月に東京女医学校をここに移した。建物はもともと学校として造られたものだけに使い勝手がよく、学生たちの喜びはひとしおだった。

校舎は河田町へ移転したものの、そこには寄宿舎がなく、寄宿生は市谷仲之町から通っていた。河田町の学校敷地内に寄宿舎を建ててほしいと要望されたが、先立つものがない。彌生は知恵を絞り、学校創立3周年を記念した音楽会を11月に開催し、その収益で寄宿舎を造ろうと考えた。

この計画に学生たちも大賛成し、授業の合間や放課後に東京市内を駆け回り、切符を売りさばいた。売上げ枚数は実に1,200枚にものぼり、本郷の中央会堂で昼夜2回に分けて記念音楽会が盛大に行われ、東京女医学校の名声を大いに高めることとなった。

これで得た収益金をベースに、明治37(1904)年6月、校舎の隣に診察所を兼ねた寄宿舎を新築。市谷仲之町から引っ越してきた20人の学生たちの顔は、明るい希望に満ちていた。

編集後記

■遺伝子医療センターのスタッフは圧倒的に女性が多く、取材当日のカンファレンスは出席者全員が女性。新しい医療分野を女性たちが切り開いていることを頼もしく思いました。

■一方、泌尿器科ではなんと朝7時からカンファレンスが行われ、しかも話す言葉は英語。研修や見学に訪れる外国人に配慮して数年前から英語で行っているとのことですが、腎移植で世界的に名声を得ていることを物語る一面でした。

■その腎移植の基盤を築いたのが、田邉教授に引き継ぐまで泌尿器科をリードしてきた東間教授。奇しくも、至誠人に登場いただいた貴戸朋子さんが、「すばらしい先生でした」とエピソードを交えながら東間教授について語ってくれました。

■八千代といえば京成バラ園。取材に訪れた日はちょうど見頃で、園内はまるで別世界。「美しい」の一語に尽きるものでした。一見の価値あり。

■筆を手にして漢字で自分の名前を書き、浴衣に着替えて神妙な手つきで茶碗を口に運ぶアメリカの女子学生。大東キャンパスでの文化交流はとてもほほえましいものでした。

●本誌掲載写真のうち患者さんが写っているものはすべて許可を得て撮影しています。

八千代医療センターの中庭にたたずむ鮮やかなオブジェ。

Sincere
シンシア
No.4

発　行　学校法人 東京女子医科大学
〒162-8666 東京都新宿区河田町8-1 TEL.03-3353-8111（代）
http://www.twmu.ac.jp/
発行日　2015年7月
制　作　株式会社 教育広報社

■『Sincere』に関するお問い合せやご意見・ご要望は、下記までお気軽にどうぞ。
〒162-8666 東京都新宿区河田町8-1　東京女子医科大学　総務部広報室　Mail address: kouhou.bm@twmu.ac.jp